

コラム：松本と蚕糸

松本市における製糸場の始まりは、明治4年（1871）4月に松本藩の命により生糸会社が設立されたことからとされています。

製糸場の数は、明治6年（1873）当時は旧松本市域において5か所が稼働していましたが、明治13年（1880）には38か所と大きく増え、明治23年（1890）に片倉（現：片倉工業（株））が松本に製糸場を開いたことにより近代製糸業が発展しました。

また、蚕の卵を製造する蚕種製造業も松本において盛んとなりました。旧本郷村を中心に蚕種の生産が行われ、旧安曇村の稲核などにある風穴を利用した夏蚕の蚕種製造や、品種改良によって一時は松本が蚕卵国都と言われるほどでした。

蚕種製造業が興隆すると、農村部においては養蚕業が広まり、現在の松本市も含まれる旧東筑摩郡では明治18年（1885）から明治43年（1910）までの25年間に養蚕農家数は約2倍となり、繭の生産量は蚕の品種や飼育法の改良により3倍以上となりました。養蚕は農閑期に行われることが多いことから、繭の生産量の9割が夏から秋にかけて生産される夏秋蚕となりました。

明治41年（1908）には市街地の東部、現在のあがたの森の北側に当時の農商務省が東京蚕業講習所夏秋蚕部を設置し、その後、蚕業試験場として試験研究を行いました。生糸の品質を向上させる蚕の一代交雑種は試験場により研究され、蚕種家による普及活動の結果、生糸の生産量は順調に伸びていきました。

このような蚕糸業の発展により、旧松本高等学校や松本医学専門学校（信州大学医学部の前身）、日本銀行松本支店など、現在の松本の経済・産業、教育分野の骨格となったものが取り入れられてきました。

県庁所在地ではない松本に日本銀行の支店が置かれたことはとても珍しいことであり、それが実現したのは、当時の産業の核であった蚕種業・製糸業・養蚕業が中南信地域に深く根を下ろしていたためと考えられます。

しかし、製糸業や養蚕業は昭和に入って世界恐慌に見舞われたり、戦争による産業転換の流れや合成繊維の普及により衰退していきました。



稲核の風穴



蚕業講習所跡（現在の蚕糸記念公園）
に建つ産業革新記念碑と秋蚕創業碑